このイラストはAIで生成しています

ていじせい　かぜ
定時制の旋風

２０２５年　11月号

県立小野工業高等学校　定時制課程

発行者 教頭 松本康一

「これからの時代に必要な「センス」の磨き方」

先日、劇作家・演出家であり、芸術文化観光専門職大学学長を務められている平田オリザ氏の講演会に参加する貴重な機会を得ました。平田氏ご自身、定時制高校への進学や自転車での世界一周旅行といった異色の経歴をお持ちで、そのお話は、これからの学校教育がどのように変化し、変化すべきかについて深く考えさせられるものでした。

１．求められるのは「学力」から「センス」へ

平田氏が語られた結論の一つは、今後の大学入試は、単なる知識や学力だけではなく、「センス」を問われる時代になっていく、という点です。高校に入学してからの数年間の勉強面での努力だけでは通用しなくなり、その人の「人間性」、すなわち物事を捉える感性や社会性といった資質が、より重要視されていくということです。ここで言う「センス」とは、「優れた感覚を磨き、気の利いた判断や表現ができるように努力すること」を指します。これは、近年注目されている「非認知スキル」と言い換えられる能力でもあります。

２．「センス」を高めること、それが学校に来る意味

では、私たちはどうすればこの「高いセンス」を持つ人間になれるのでしょうか。その答えに行き着くヒントが、まさに「学校に来る意味」にあると平田氏は語られました。非認知スキルとしてのセンスを向上させる一つの方法は、「みんなで何かをやり遂げ、結果を出して喜び合うこと」です。皆さんが日々取り組んでいる勉強や部活動も、例外ではありません。一人では乗り越えられないような「しんどいこと」や「うまくいかなかったこと」を、仲間と協力して乗り越え、結果を分かち合った時、皆さんの人間としてのセンスは確実に磨かれ、高まっています。集団の中で目標達成を目指す経験こそが、未来で求められる人間性を育むのです。

3.時代を超える教育の本質

平田氏は、戦後の日本で教職に就かれた東井義雄氏の教育論に触れ、その先見性を絶賛されていました。東井氏が著された『村を育てる学力』(1958 年)には、現代の教育に必要なことが、すでに 67 年も前に提唱されています。

＜東井義雄著『村を育てる学力』(1958 年）より（引用）＞

『「おやおやとおどろけ。なぜ？と、不思議がれ。わかるまで調べろ。こうかもしれないぞと考えろ。こうしたらどうなるだろうかと考えてやってみろ。いつでもどこでもそうかと、確かめてみろ。」

人間は好奇心を持った猿だ。普通、野生の動物は、子供時代には好奇心はあるが、それを早くに失っていく。人間だけが成長した後も好奇心を持ち続ける。

「おやおやとおどろく」心を、高校大学になっても持続させるような教育を考えなければならない。「なぜ？と不思議がる」授業、「こうかもしれないぞと考える」試験を、手間暇かけてつくっていく。何もわからない未来に向けて、私たちが子どもたちにしてあげられることは、おそらくそれしかない。』

私たちは、この偉大な先人の言葉を胸に刻みつつ、変化する社会に対応できる教育を実践していきます。生徒の皆さんには、学校での集団活動や様々な経験を通して、「センス」という名の人間性を存分に磨き上げてほしいと心から願っています。

【第2回地域清掃美化活動】

10 月 25 日（土）

日頃お世話になっている学校周辺の公園や通学路、駅といった公共の場の大掃除を意欲的に行ってくれました。前日に遅い時間まで授業を受けていたにも関わらず、翌日の朝から活発に活動しているその真摯な姿勢と、地域や学校環境を自分たちの手で良くしようという奉仕の精神は、まことに輝かしいものでした。　　（文責　教頭　松本 康一）